

# 『今鏡』と『大鏡』の皇妃描写

—「帝王の寵妃」という人物描写について—

小笠原愛子

『今鏡』の帝紀では、皇位継承に影響を及ぼす重要な后妃達が、夫帝（院）の寵妃であったと語られている。『今鏡』は、彼女らの重要な地位を、夫帝の寵愛を語ることで説明しようとしているのだが、これは『今鏡』が踏襲した『大鏡』には見られない人物描写であり、『今鏡』が語る院政期の皇嗣決定の在り方の反映である。

## 一、はじめに

### 一一（一）、『今鏡』と『大鏡』

本論は、院政期を主な叙述対象とする歴史物語である『今鏡』について、その后妃描写の特徴と意図を、『大鏡』と比較することでより明確に示そうとするものである。『大鏡』は「入道殿下（＝藤原道長・引用者註）の御栄え」（二二）<sup>①</sup>つまり藤原道長の栄華を語る歴史物語であり、『今鏡』はその『大鏡』の「後のこと」（上一六）<sup>②</sup>を語る続編である。『今鏡』は、『大鏡』の続編であることをその序に明言しており、形式等枠組みの点では『大鏡』を踏襲する意識が非常に強い一方、人物描写や取り上げる話題等の叙述内容には、『大鏡』とは大きく印象を異にするところが多い。本稿で取り上げる后妃描写もその一つで、『今鏡』の後妃記事は、その配置においても、叙述内容においても、『大鏡』と

は大きく異なっている。その相違は、『大鏡』が語る摂関期と『今鏡』が語る院政期の違いの反映であり、また両書の歴史認識の反映でもある。

### 一一（二）、摂関期と院政期

現在、一般に使われている「摂関期」と「院政期」という時代区分について確認しておきたい。これらはいずれも「摂関政治」「院政」と呼ばれる政治の形態が見られたことによる呼称である。ただし、「摂関政治」「院政」はともに当時の諸々の事象・経過によって生起・定着した政治形態であって、正式の制度として定められたものではなく、それゆえ明確にその始点と終点を定めがたい。

本稿で『大鏡』と『今鏡』について考察する上で特に重要なのは、摂関期の終点及び院政期の始点である。現在一般的には、摂関家を外戚としない後三条天皇即位によって摂関期が終焉を迎えたとみなされてい

る。『今鏡』においても後三条帝代は画期とされているが、それがどのような意識による時代区分であるのかを明確にするため、天皇の血筋だけでなく「摂関政治」「院政」という政治の在り方から論じた先学の論を確認しておきたい。

「摂関政治」とは、藤原氏出身の摂政または関白の主導による政治であり<sup>(3)</sup>、「院政」とは院の主導による政治である。ここでいう「政治」が主に何を意味するかについて、河内祥輔氏は、次代の天皇を決定することこそが当時の「政治」であったと述べられ、宇多院も院政を布いたと見なし得ると論じられた<sup>(4)</sup>。また伴瀬明美氏は、皇嗣及び皇嗣を産む女性の選択権・決定権が、摂関に掌握されていたのが摂関期であり、院に掌握されていたのが院政期であると論じられた<sup>(5)</sup>。

### 一―(三)、『今鏡』の時代区分

『今鏡』の帝紀「すべらぎ」は、上中下の三巻に分けられており、この巻分けは『今鏡』の時代区分を反映している<sup>(6)</sup>。『今鏡』帝紀は、後三条帝紀のうち、即位以前を語る「司召」章を「すべらぎ」上巻巻末に、後三条天皇即位以降を語る「手向」章を中巻巻頭に置いている。しかも中巻巻頭に置かれた「手向」章の冒頭は、「この帝世をしらせ給ひて後、世の中みな治まりて、今に至るまでそのなごりになむ侍りける」(上一二四) というもので、後三条天皇即位が時代の画期であり、「今にいたるまで」続く時代の始まりであるとみなされていることが、配置と叙述内容の双方から明白である。また、次代白河天皇の帝紀には「先(＝先代後三条帝代…引用者注)の御なごりにて、一の人(＝摂関…引用者注)

のわがままに行なひ給ふもおはせねば」(上一四七)とあり、後三条帝即位によって摂関政治の時代が終わったという歴史観が明言されている。

上巻巻末に置かれた後三条帝紀「司召」章の最初の話題は、尊仁親王(後の後三条天皇)立坊の経緯である。ここでは、死の床にある父帝後朱雀天皇が、功臣能信の機転によって頼通の抑圧に抗し二宮尊仁親王を東宮に立てる様が、緊迫した会話文を直接引用することによって活写されている。そのような場面描写はこれ以前の章には見られず、加納重文氏は、「『今鏡』における」逸話としては実質的に最初に登場するもの<sup>(7)</sup>。「今鏡作者にとつて、実質的に最初の物語」であると述べて、この皇嗣決定のエピソードの重要性を指摘された<sup>(8)</sup>。上記に加え、この逸話は、その出色の描写のみならず配置においても注目すべきものである。『今鏡』の帝紀は、父帝の名↓母后の名↓生誕↓親王宣下↓立太子↓即位という順で経歴を列挙した後に、具体的なエピソードを置くという一定の形式を順守する意識が極めて強いのだが、この立坊のエピソードは例外的に後三条天皇の経歴を語り終わるより前に、経歴の途中に挿入される形で置かれている。『今鏡』は、後三条天皇を摂関期と院政期を画する天皇として位置付ける上で、摂関の意に反して天皇となったという経歴に極めて大きな意味を認めているのである。

### 二、『今鏡』の母后

#### 二―(一)、美福門院の重要性

『今鏡』が皇嗣決定の在り方を重要視していることは、本書の各所に見出せる。『今鏡』は『大鏡』に比して、皇妃、とりわけ母后に関する記事が多く、特に帝紀の末尾には必ず母后の伝を付している。『今鏡』は皇妃を重要視しているといえるのだが、それが帝紀に語られているからには、帝位に関わる重要性を認められていると考えるべきであろう。

本節で取り上げる近衛天皇の母后美福門院得子は『今鏡』中で最も記述量の多い人物で、彼女の重要性はその点のみからも明らかである。得子所生近衛天皇の帝紀は、その二章全体を通して母后得子の事蹟を語ることに終始しており、近衛帝紀というよりも得子伝の如き様相を呈している。一見奇妙なこの現象は、『今鏡』が、近衛天皇という天皇の存在を説明するためには母院得子を語る必要があると考えたことの表れである。

## 二一(二)、美福門院に関する叙述

近衛帝紀は「男山」「虫の音」の二章で、この二章は『今鏡』の帝紀としても比較的長文である。帝紀下巻巻頭に置かれた「男山」章は、母院得子が父院鳥羽に入侍したことから語りはじめられており、帝紀冒頭に天皇の父母の名と経歴を列挙してから具体的なエピソードを語るという形式を持つ『今鏡』の中では、特異な形の帝紀であるといえる。

### 〈「男山」冒頭〉

鳥羽の帝、位の御時より参り給へりし后（待賢門院璋子）は、みこたちあまた生み奉りて、（鳥羽帝が）位下りさせ給ひしかば、女

院と申しておはしましき。法皇（白河上皇）の養ひ奉りてかしづき給ひしに、法皇おはしまさで後、宇治の后（高陽院泰子）参り給ひて、御方々いどましげなれども、院（鳥羽院）はいづかたにもうときやうにてのみおはしまししに、忍びて参り給へる御方（得子）おはして、いづこにも離れ給はず。やや朝政事もなかるべし。いとやむごとなき際にはあらねど、中納言にて御親はおはしけるに、母北の方は、源氏の堀河の大臣の御女におはしける上に、類ひなくかしづきこえて、ただ人にはえ許さじともてあつかひてなむ。

（上二七〇）

傍線部は『源氏物語』の引用で、得子は桐壺更衣に重ねられ、鳥羽院が他の上位の後達をさしおいて専ら得子を寵愛したことが印象づけられている。得子が甚だしく寵愛されたことを述べるために『源氏物語』を引用して桐壺更衣に重ね合わせるという描写は、この後も繰り返されている。

章名の「男山」は、鳥羽院が得子の皇子出産を祈らせた際の願文の文句である。ここで、鳥羽院は得子寵愛故に、得子の皇子出産とその皇子の即位を望んだと語られている。非公式に入侍した女房に過ぎなかった得子が、女御から皇后へ、そして最終的には母后女院にまで上ったのは、全て彼女を寵愛した鳥羽院の意思によるものとされているのである。

近衛帝紀の後半である「虫の音」章はその冒頭で近衛天皇の崩御を語った後も、得子の事蹟を語り続ける。ここでも、鳥羽院が「女院（得子）の御ことのいたはしき」（上二八八）つまり得子の地位の安定に配慮して次帝を選定したことや、鳥羽院自身の崩御に際しても、所領その

他を得子に帰せしめるべく遺言したこと等が語られている。そして、得子の往生を以て近衛帝紀が語り納められるのである。

近衛帝紀は、そのほぼ全文を通じて得子の半生、それも彼女が夫院鳥羽の寵愛によって母后女院となったことを語っているものであり、近衛天皇よりも得子と鳥羽院について語るの方が多く、鳥羽帝紀には得子寵愛は語られていない。この配置が意味することは、鳥羽院による得子寵愛は、鳥羽院ではなく近衛天皇にとって重要な意味を持っていたということである。

## 二―(三)、『今鏡』における帝王の寵妃

得子同様に、桐壺更衣に重ねられることで夫帝の寵妃であったことを印象づけられている母后に、堀河帝母(白河中宮)賢子がいる。堀河帝紀二章のうち、後半の「所々の御寺」章は、母后賢子を語る章である。

賢子は夫帝白河天皇の在位中に薨じており、その際の白河天皇の嘆きの甚だしさを、『源氏物語』「桐壺」巻を引用しながら語るのが「所々の御寺」章である。章名「所々の御寺」も、白河天皇による賢子追善のための造寺を指している。堀河帝紀でありながら、堀河天皇ではなく母后賢子と父帝白河天皇の関係を語っている点や、白河帝紀における賢子への言及は一文の簡潔な記述のみである点など、先に見た近衛帝紀における得子記事と同様の特徴を指摘することができる。

近衛帝代が鳥羽院政下であり、近衛天皇が鳥羽院によって選ばれた帝であったのと同じく、堀河帝代は白河院政下であり、堀河天皇は白河院によって選ばれた帝であった。近衛帝紀に、母后得子への治天鳥羽院の寵

愛が語られ、堀河帝紀に、母后賢子への治天白河院の寵愛が語られているのは、近衛天皇を帝たらしめたのが鳥羽院の意思であり、堀河天皇を帝たらしめたのが白河院の意思であったことを示すためであろう。

「帝王の寵愛」が帝意を意味するという叙述の様式は、治天君の妻后以外の立場であった后妃にも指摘できる。待賢門院璋子は、所生崇徳天皇の帝紀に養父白河院鍾愛の養女であったと語られているが、それは崇徳帝代が白河院政下であり、崇徳天皇が白河院によって即位した帝だったからである。璋子にはいま一人の所生天皇である後白河天皇があるが、後白河帝紀における璋子への言及は名を挙げるのみの簡略なものである。二代の帝母となった后妃を帝紀に語る際には、後代の方の帝紀末尾に母后伝が置かれるのが『大鏡』『今鏡』共通の原則であるにもかかわらず、璋子伝がその原則に反して先代の崇徳帝紀に語られているのは、崇徳天皇即位には母后璋子を通じて治天白河院の意思が大きく反映されていた一方、後白河天皇の即位には白河院の意思は関わっていないからである。

## 三、『大鏡』の母后

### 三―(一)、中后安子の重要性

母后を語ることの少ない『大鏡』において、一人際だって長文の記事を持つ皇妃が、「中后」安子である。村上天皇の中宮であり、冷泉・円融天皇の母后であった彼女は、摂関家の権勢掌握に極めて大きく貢献し、道長へと続く九条流の摂関継承を確実なものとした存在として重要視さ

れている。

『大鏡』における安子の重要性が、撰関家にとつての重要性であったことを反映し、長大な安子記事の大半は帝紀ではなく藤氏伝で語られている。彼女の父である九条殿師輔の伝は、最初に師輔の経歴を列挙した後には「第一の御女、……」（一四八）と話題を安子に移して、彼女の夫帝村上天皇への影響力や彼女の人柄を示す具体的エピソードを語り始めており、師輔伝でありながら、師輔よりも安子を語ることに多くの紙幅を費やしている。そして、安子が后として理想的な人物であったことを述べた後を、次に引く一文で締めくくっている。

冷泉院・円融院・為平式部卿宮と、女宮四人との御母后にて、またならびなくおはしましき。帝・春宮と申し、代々の関白・摂政と申すも、多くは、ただこの九条殿の御一筋なり。

(一五三)

師輔流の栄華は安子あってこそのものであると明言されているのである。

### 三―(二)、安子に関する叙述

安子が『大鏡』に語られたエピソードは、以下に挙げるものである。

- ① 選子内親王出産の産褥に薨じた際の、夫帝村上帝の甚だしい嘆き。(円融帝紀後半)
- ② 村上天皇に対しても嫉妬をあらわにし、深夜に渡御があった際にも応じなかったこと。

③ 村上天皇の殊寵を被った小一条女御芳子の美貌を見て嫉妬し、土器の破片を投げつけたこと。

④ 安子が芳子に土器を投げつけたことに怒った村上天皇が安子の兄弟達を謹慎させると、安子は強引に村上天皇を呼びつけ、兄弟達の謹慎を説かせたこと。

⑤ 安子は本来の性質が寛容で、上に立つ者としての人徳を備え、夫帝の善政を扶けたので、夫帝は彼女を相談相手として頼りにしており、彼女が薨じた際には「田舎世界まで」（一五二）の人民が嘆いたこと。

①のみが帝紀に語られたもので、それ以外の②④⑤はすべて安子の父である九条殿師輔の伝に語られている。いずれも夫帝村上天皇との関係、とくに夫帝への安子の影響力を語るものだが、それらは村上天皇ではなく九条殿師輔、あるいは九条家にとつての重要な意味を有しているのである。

『大鏡』に語られた安子と夫帝村上天皇との関係は緊密で、しかもその夫婦関係は、撰関家の栄華という『大鏡』の主題を語る上で極めて重要な意義を有している。しかし彼女は「ときめ」いた、つまり夫帝から寵愛されたとは語られない。安子記事に先立って述べられる村上天皇後宮における安子の人物像は、次に引くようなものである。

第一の御女、村上の先帝の御時の女御、多くの女御・御息所のなかに、すぐれてめでたくおはしましき。帝も、この女御殿にはいみじう怖ぢ申させたまひ、ありがたきことをも、奏せさせたまふことをば、いなびさせたまふべくもあらざりけり。

(二四八)

「すぐれてめでたく」、また夫帝村上天皇が「よろづの政をば聞こえさせ合はせてせさせ」(二五二)した後であった安子への、夫帝の感情は、「いみじく怖ぢ」というものであったという。『今鏡』の重要な后達が治天君からの寵愛を印象付けられていたことは、大きく異なる人物描写である。

### 三―(三)、宣耀殿女御芳子

『大鏡』において夫帝の寵妃であったと語られているのは、村上天皇の宣耀殿女御、小一条殿師尹女芳子である。

師尹伝では、「(村上天皇が芳子を)いとかしこくときめかさせたまひて」(二一八)とその殊寵を述べ、村上天皇と芳子の贈答歌や、『古今和歌集』を暗誦していた芳子を村上天皇が試問したこと、村上天皇が芳子に対して直々に箏を伝授したこと等を語っている。しかし、寵愛の篤さを語る具体的エピソードを締めくくるのは、芳子が決して安子には及ばないことを示す村上天皇の言葉である。

……かぎりなくときめきたまふに、冷泉院の御母后(安子)うせたまひてこそ、なかなかこよなくおぼえ劣りたまへりとは聞こえたまひしか。(村上天皇が)「故宮(安子)の、いみじうめざましく、やすからぬものと思したりしかば、思ひ出づるに、いとほしく、悔しきなり」とぞ仰せられける。

(二一九)

『大鏡』は、「かぎりなくときめ」いていた芳子への寵愛が安子の薨後には却って衰えたと述べ、しかもその理由が「安子が気の毒だから」であると村上帝の口から語らせている。ここでは、芳子を甚だしく寵愛した村上天皇にとつてすら、芳子よりも安子の方が大切であったと明示されているのである。

この後には、芳子所生の皇子が「御心きはめたる痴れ者」(二一九)であったことが述べられ、芳子の兄弟の失態や小一条流の凋落が語られていく。芳子がどれほど寵愛されようとも、彼女は安子にかなうべくもないし、芳子の実家である小一条家も栄えることはない。

### 四、おわりに

『今鏡』は、帝位に影響を与えた重要な后達を夫帝の寵妃として描写したが、その『今鏡』が踏襲した『大鏡』では、寧ろ重要な后妃が寵妃として語られることはなかった。両書の人物描写に認められるそのような相違は、院政期と摂関期の違いを的確に反映している。『今鏡』に特徴的な皇妃像は、同書の、時代認識に即した人物描写であるといえよう。

#### 〈注〉

(1) 本稿における『大鏡』引用は、新編日本古典文学全集『大鏡』(橋健二・加藤静子 校

注 一九九六年 小学館)により、頁数を付す。なお、私に傍線・注記を加え、表記を改めたところがある。

(2) 本稿における『今鏡』引用は、『今鏡全釈』上下(海野泰男 訳注 一九八二年三月・

一九八三年七月 福武書店)により、巻号と頁数を付す。なお、私に傍線・注記を加え、表記を改めたところがある。

(3) 『国史大辞典』(一九七九年～一九九三年 吉川弘文館) 及び『平安時代史事典』(一九九四年 古代学協会・古代学研究所) による。

(4) 『古代政治史における天皇制の論理』(増訂版) (二〇一四年一〇月 吉川弘文館)

(5) 「院政期における後宮の変化とその意義」(『日本史研究』四〇二 一九九六年二月)

(6) 拙稿「帝紀及び列伝に見る『今鏡』の時代区分意識」(『大阪夕陽丘学園短期大学紀要』六一 二〇一八年二月) に論じた。

(7) 加納重文氏『歴史物語の思想』(一九九二年二月 京都女子大学)

## 【Abstract】

### Differences between depictions of the Empress in the *Imakagami* and the *Ōkagami*

OGASAWARA Aiko

In the imperial genealogy of the *Imakagami*, many cases are narrated of empresses having prominent positions and influencing succession. Those empresses were considered as having been the favored mistresses of the former Emperor. Although the *Imakagami* explains the importance of their position in terms of the former Emperor's favor, this portrayal cannot be found in the *Ōkagami*, a work that the *Imakagami* followed. This shows that it is a reflection of the cloistered government period described in the *Imakagami*.